

現代教養 センター FD 研究会 議事録

『学生の能動的な学びを深める実践的な教育の成果に対する評価方法について』

実施報告

日時： 2016年7月13日（水） 17:00～18:00

場所： 15号館 4階 第2会議室

参加者： 現代教養センター 19名
青木 孝子／大江 一平／岡田 工／岡本 明弘／加藤 次直／金山 浩司／木村 英樹／定岡 利典／佐藤 恵子／田島 祥／谷 晋／中村 隆志／二ノ宮リム さち／福留 恵子／堀本 麻由子／前田 泰樹／松本 俊吉／村松 香織／吉田 厚子（敬称略）

司会者： 現代教養センター 田島祥講師

1.開会の挨拶

現代教養センター 所長 佐藤恵子教授

今年度の現代教養センターの教育分野における目標として、「学生が能動的に学びを深める実践的な教育の成果に対する評価を検討・発展させること」が掲げられている。今回の研究会ではこの目標に関連して、社会的実践力と知識の結び付けを具体化する話題提供を頂く。

2. 発表①

「学生自身の振り返りに基づく評価—学習成果の社会的活用を目指して—」

現代教養センター 堀本麻由子准教授

1) 評価に関する問題意識の背景—生涯学習論、成人学習論からの視点—
生涯学習論の分野では1980年代後半から臨時教育審議会において「学歴偏重の風潮をあらため、社会全体として、人々の能力や学習の成果が適切に評価されるようにする必要があること」が提唱され、生涯学習社会を実現する上での学習評価のあり方について検討されてきた。とりわけ1999年以降、特定の社会的状況の中で自らの人生を創り出すための「能力」に関して、「学士力」「社会人基礎力」「キー コンピテンシー」という「実践的能力」のあり方に焦点が当てられ、社会で生きていく能力というのは、単に頭の中に知識が蓄積されているだけではだめで、それが社会との関係の中で生かされてこそ意味があるという思想のもと、「実践的能力」を育成するための学習評価のあり方が大きな研究課題の一つとなっている。例えば、「テストによる教育評価の見直し」「自己評価と相互評価」「社会の改善につながる評価」「評価から学習成果の社会的活用」などが検討されている。

2) 何を評価するのか—実践的能力育成のために—

- (1) 「学び方を学ぶ」—振り返りの多重構造による学生の考え方、学び方にゆさぶりをかける
 - ・ 毎回の振り返りシート(自己評価、教師との相互評価)
 - ・ ピア レビュー(相互評価)個人の振り返りの学生同士による相互評価、グループ発表の相互評価
 - ・ 最終レポート(学習したことの記録を振り返る)
- (2) 評価の観点
 - ・ 自分の言葉として具体例で語られているか。
 - ・ 自分自身の課題を把握しているか。
 - ・ 自分自身の思い込み、前提、固定観念などへの気づきがあるか。
 - ・ 新たな行動や取り組みの視点を広げているか(他者や社会などへの働きかけ)、など

3) 課題

- (1) 振り返りの内容を教員が評価することへのジレンマ
- (2) 「自らの学習目標(課題)」を設定する力に、ばらつきが多い
- (3) 学生自身が評価されることに慣れすぎている—主体的な学習を妨げる要因の一つ—
- (4) 主体的な学習のための評価のあり方(学生自身の評価能力を高めることではないか)

質疑応答

Q: 学生に総合評価のやり方は指示を出しているのか。(福留恵子准教授)

A: 学生に総合評価の詳細な指示は出していない。学生には振り返りで他の学生が自分と異なる考えをしているのを見てもらっている。相互に異なる視点から学ぶことを重視している。

Q: 揺さぶりの方法によって、学生の学び方はどのように変わるのか。(福留恵子准教授)

A: 学生自身は自分たちの経験を過小評価している傾向がみられる。一般的な回答がよいと思いついて入っている者もいる。「自分のこと」をレポートに書いてよいのだということを伝え、経験を重要視するよう導くことによって、学生自身の学び方への姿勢が変化し得ると考えられる。

Q: 学生の自己課題設定とは、教員による課題設定に沿ったものなのか。(佐藤恵子教授)

A: あくまで学生が自分自身で課題を把握し設定することを重視している。

3. 発表②

「学生同士の相互作用に基づく評価—授業支援システムを利用した相互評価—」

現代教養センター 主任 岡田工教授

科目「プロジェクト入門」における実践例を元に、学生同士の評価、つまり学生が学生を評価することの重要性を如何に引き出すか、といった問題に対する取り組みについてお話を頂いた。特に今回は、授業支援システムを利用した創意工夫の例を取り上げて、その方法と効果について述べられた。その結果、以下の内容が得られたと報告された：①学生による相互振り返りは効果が高いと考えられる。②学生の評価点数の公平性については、彼らなりに真剣につけていていると考えられる。③成績評価は、毎回の振り返りや報告書などと合計し、総合的に判断するべきであると考えられる。

授業の詳細内容は、以下の通りであった。

1) 「プロジェクト入門」では、企画や運営を通して、学生が仲間と共に課題（ミニプロジェクト）に取り組み実践力を身につけることを目的としている。そのためにグループワーク、PBL（project based learning）、体験型学習（アクティブラーニング）などを伴った授業構成となっている。「プロジェクト入門A」では、「理科ばなれ」対策として小学校4年生へ向けた理科教材の開発を行い、子供たちが目を輝かせ、楽しめる理科教材を開発することを学生たちは目標としている。

2) 授業計画は、以下の通りであった：①ガイダンス、②理科離れ、小学校での学習、③計画方法、発表方法について、④グループワーク、⑤教材テーマ決定、計画、⑥実験準備、⑦実験、⑧発表準備、⑨中間発表、⑩グループ反省会、⑪最終発表準備、⑫最終発表会、⑬報告書作成、⑭報告書仮提出、⑮報告書提出。
また、PDCAサイクル：計画（Plan）→製作、実験（Do）→発表会、評価（Check）→、反省会、改善（Act）の元、授業を進めた。

3) 授業支援システムのアンケート項目を利用した。アンケート項目（選択肢）は以下の通りとした。

- ① 全体として準備はできていましたか
- ② 発表の内容はわかりやすかったですか
- ③ 子供たちが興味をもつ内容だと思いますか
- ④ もう一度見たいと思いますか
- ⑤ 総合的に評価して下さい。
- ⑥ 良かった点を書いて下さい。発表者は、今回頑張った点を記入して下さい。
- ⑦ 改善したらよい点を書いて下さい。発表者も記入して下さい。
- ⑧ 発表者にコメントを記入して下さい。励みになります。発表者は感想を記入して下さい。

アンケート集計結果から、学生は2回発表を行うことによってアンケート結果の評価が向上することが分かった。

4. 全体を通しての質疑応答

Q: 授業におけるコンテンツ（知識）と方法の運動についてどうとらえているか。(前田泰樹教授)

A: 本授業では、各学生が各学部における専門教育で得た知識を持ち寄り、実践的能力を育むことに主眼を置いている。新カリキュラムの発展教育科目においては初めの2コマ程度で主題となる知識を提供することを想定している。(堀本麻由子准教授)

Q: 学生自身のレポートを自己評価させることを教員が評価することに対していかが思われるか。(前田泰樹教授)

A: (成績との関連について、最終的に教員が評価するしかないことに対してはジレンマを感じている。(堀本麻由子准教授)

Q: 発表の総合評価はどのようにしているのか。(二ノ宮リムさち准教授)

A: 学生が書く普段のコメントを見て、成績評価を行っている。コメントについては、見るポイントとしてアドバイスを与えている。(堀本麻由子准教授)

Q: 実践のなかでどのように知識を評価するかということについて意見を聞きたい。講義の知識をプロジェクトで抽象化できるのか。知識の使い方はプロジェクトの中で行えるのか。(福留恵子准教授)

A: グループによって効果が異なる。数字的に見るのは難しい。(岡田工教授)

A: 知識が使えているかどうかを自己評価・総合評価するのは、今後の課題である。今回の発展教養型授業では、知識の提供は目的としていない。(堀本麻由子准教授)

Q: 知識教育と実践教育において、授業は分化の道しかないのか。(福留恵子准教授)

A: 持続して可能性をみってみる。アンケート結果を参考にする。などで長い目で見ることも必要かもしれない。
会場より：実践教育においても、授業内で基盤となるテーマに沿った知識を提供し、それを共有しつつ実践に取り組むかたちもある。

5. 閉会の挨拶

現代教養センター 所長 佐藤恵子教授

本日の内容は2018年度以降のアクティブラーニングにつなげるための情報・意見の共有という意味において有意義であったと思われる。今後もこういった機会を設け、継続して考えていきたい。